

新年あけましておめでとうございます

東京外国語大学長 亀山郁夫

異文化交流施設の竣工

府中キャンパスに移転して10年の節目にあたる今年、私たちの宿願だった異文化交流施設が無事竣工を迎えることができました。施設名は、「アゴラ・グローバル（「地球の広場」）」（“AGORA Global”）、施設内の501席からなるホールには、私たちの大学歌にちなんで「プロメテウス・ホール」（“Prometheus Hall”）の命名が施されました。本施設の竣工をもって、府中キャンパスの基本部はすべて完成したことになります。西ヶ原キャンパスを卒業され、まだ府中キャンパスを訪れたことがない、という卒業生の皆さん、どうか、ぜひ府中まで足をお運びくださいますように。本施設には、在学生とともにゆっくりくつろげるスペースも用意してあります。また、アゴラ・グローバルの建設に際しては、主としてホールの設備充実を目的とした募金活動を行いました。この経済的悪環境のなか、じつに2400万円を超える多大なご支援を頂くことができました。これもひとえに外語会の皆さまを中心とする卒業生のご努力の賜物であると、心より感謝する次第です。なお、本施設のお披露目を兼ねたオープニング・セレモニーが5月22日に行われる運びとなりました。内容につきましては、本会報折込ちらし、HP上等で追ってお知らせしたい考えです。

教養教育を考える

さて、最近、私が常々、考えることが一つあります。それは、わが国における教養教育の危機という問題です。最近、学生たちと話しながら痛感させられるのは、彼らの持っている「教養知」とでもいうべき知的な体系が、断片的で、一つのまとまりをなしていないということです。一方、これは、「豊かさ」に安住しすぎた私たちが宿命的に直面せざるをえない現実、という諦めに似た気持ちがないではありませんが、高等教育を預かる大学としては、こうした状況を座視しつづけるわけにはいきません。ただ、ここで確認しておきたいのは、教養とは、やはり時

代の生きた産物であって、一つの世代が他の世代に押し付けるような内容ではあっていけないということ、また、恒久的な価値を持ちつづける教養は存在しないということです。シェークスピアや、ゲーテでさえ、いつかは「教養」のカテゴリーから消えるかもしれないのです。

世界を見据えた教養人の育成

私たち人間は、喜びと苦しみの戦いのなかで生き続ける存在です。しかし一回限りの生命であれば、できるだけ多くの喜びに接したいというのが心からの願いでしょう。私が、学生たちに切に望むことは、世界の人々とコミュニケーションするツールとしての教養だけではありません。それぞれの学生が将来、生きる喜びの源泉を見出すことのできる実のあるリアルな教養です。その実現のために、大学がいま早急に考えるべきことは、21世紀グローバル化時代の価値観にのっとった教育カリキュラムの再編です。最近の受験誌などを見ても、本学を志願する学生たちはあいかわらず高レベルにあります。しかし、たんに「言葉好き」に限ることなく、そうした彼らを、世界諸地域の言語や文化、社会に対する問題意識をもち、なおかつ世界に通用する「教養人」に育てあげていかななくてははいけません。

世界知の蓄積、地球社会との協働

さて、わたしたち大学側では、昨年六月に無事社団法人として再スタートを切った東京外語会と今後さらに緊密な連携体制を組んでいきたいとの願いから、さまざまなアイデアを出させていただきました。思いは一つ、誇りをもって、「私の大学」、「私たちの大学」と呼べる大学の末長い持続です。法人化からほぼ6年が経過し、この4月から、第二期の中期目標・中期計画期間に入ります。本誌が出る頃には、運営費交付金の配分額等も決定しているはず。私としては、「世界知の蓄積、地球社会との協働」を旗印に、これまでも増していっそう存在感ある大学作りをめざし、努力を続けていきたい考えです。